

アルチンボルド 《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》 ——神話の再解釈と仮装文化の関係——

江村哲朗

1. はじめに ——作品の概要確認と論文の主旨——

本論文において中心的に扱う作品は《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》である⁽¹⁾。本作はジュゼッペ・アルチンボルド (Giuseppe Arcimboldo, 1526年4月5日-1593年7月11日) がルドルフ2世のプラハの宮廷での任を終え、故郷であるミラノに戻ってから制作された絵画であり、1591年にプラハのルドルフ2世のもとへと贈られた。本作を非常に高く評価したルドルフ2世はアルチンボルドに宮中伯という貴族位を与えた。

野菜や果物、花々によって全身を構成されており、季節の神であり、その実りを受け取る神と考えられてきたウェルトゥムヌスを表現している。そしてウェルトゥムヌスとルドルフ2世を重ね合わせた一種の扮装肖像画として考えられている。

本論文では大きく3つの重点を置いている。まずはウェルトゥムヌスの神話を再検討することにより、これまでほとんど指摘されていなかったウェルトゥムヌス独自の变身方法を指摘する。次に、アルチンボルドに特徴的なモノを組み合わせる人物を形成する表現技法が当時の宮廷において流行していた仮装文化と密接に関係していることを検討する。これらのことを踏まえ、《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》という絵画を、これまであまり触れられてこなかった、ルドルフ2世のアイデンティティという観点から解釈していく。これら3つの観点から論を進めていく。

2. 神話受容と研究史の再検討

これまでの研究において重要視されてきたウェルトゥムヌス像の多くはオウイディ

ウスの神話によるものだった。『変身物語』においては色恋に全く興味を示さないポモナに恋をした四季の神ウェルトウムヌスは、なんとか彼女に近づこうとして、百姓や牛引き、植木職人、葡萄の刈り込み人、兵士、釣り師に変身した。最後には老婆となり彼女への接近を果たし、老婆の姿でウェルトウムヌスという神がいかにポモナの夫としてふさわしいかを説いた。そしてウェルトウムヌスが本当の姿を現わしたときには、ポモナはウェルトウムヌスに恋をしており、結ばれるとされている⁽²⁾。また『祭暦』においては変幻自在という言葉にウェルトウムヌスの語源があると説明されている⁽³⁾。このようにこれまでのウェルトウムヌスは四季を司る神であり、変身して恋を成就させた神と考えられてきた。

実際、ウェルトウムヌスがどのように視覚芸術化されてきたのかについて確認する。古代においては四季や実りの神として扱われることが多く、アルチンボルドが活躍した16世紀以降はポモナとの神話において老婆になり彼女を説得している場面が多く描かれるようになった。

しかし、16世紀までウェルトウムヌスを題材とした作品は極めて少ない。その理由として、ウェルトウムヌスという神の捉えにくさがあると考えられる。ウェルトウムヌスは四季という季節全体を支配する神であり、特定の季節をアトリビュートとすることは難しく、さらにその姿形は変幻自在であるため特定の形態に固定することも難しいと考えられる。これらのことから、アルチンボルドが皇帝に献上する絵画にウェルトウムヌスという神を用いて、視覚化したことは挑戦的であり意欲的な制作だったと考えられる。

次に本作がどうしてルドルフ2世を描いた絵画であると考え得るのかについて根拠を提示する。まずは、本作がルドルフ2世に献上されたときに、この絵画はウェルトウムヌスとしてルドルフ2世を描いた作品であると説明を加えるために書かれたグレゴリオ・コマニーニの詩の一部を参照する⁽⁴⁾。

さあ答えよ。私が隠しているものを発見する喜びを得たいか。今、申し出てくれ。今こそ私はヴェールを脱ぐときだ。聖なるもの、無敵なもの、幸福なるもの、気高きもの、崇高なるもの、ルドルフ。オーストリアの名誉、ゲルマンの栄光。

このようにコマニーニは詩のなかでウェルトゥムヌス自身に語らせる形で、ウェルトゥムヌスというヴェールの向こう側にはルドルフ2世が隠れていることを示している。

また、視覚的にもルドルフ2世としての特徴をとらえているためにウェルトゥムヌスとしてルドルフ2世が描かれていると考えられる。ルドルフ2世の肖像画と本作を比較する⁽⁵⁾。メロンで表わされた広いおでこやクリを中心とした長い顎、洋なしで表わされた大きく筋の通った鼻、特に小さな梨やプラムの様な果実で表わされた涙袋が視覚的に類似している。これらのことから本作はルドルフ2世がモデルとなって描かれていると考えられる。

このようにルドルフ2世として描かれたと考えられる本作とアルチンボルドが先代マクシミリアン2世に献上した四季、四大元素連作との関連において本作が皇帝を称揚する絵画であるところまでの研究史において解釈されてきた。四季連作はそれぞれの季節を代表する植物によって構成された人物画であり、それぞれが冬、春、夏、秋を表わしている⁽⁶⁾。四大元素連作はそれぞれを代表する生き物や道具によって表現され、それぞれが水、大気、火、大地を表わしている⁽⁷⁾。

カウフマンは四季の神であるウェルトゥムヌスと四季連作の関連は明確だが、四大元素との関連についてはプロペルティウスの詩にその根拠が見られると考えている⁽⁸⁾。カウフマンにならってその一部を抜粋する。プロペルティウスの詩においてもオウィディウスと同様にウェルトゥムヌスの口から

私は網を持って狩りをする。矢を持たせられたなら私は鳥撃ちの神となる。私
に竿をもたせるなら漁師にもなろう

と語らせている⁽⁹⁾。

このことからウェルトゥムヌスは四季ならびに四大元素を支配する神として捉えることが可能になる。このことを踏まえウェルトゥムヌスとしてルドルフ2世を描き出すことは、世界の循環である四季、世界の構成要素である四大元素を支配する存在と

して称揚することにつながると考えられる。

確かにこのような神としてウェルトゥムヌスを捉えることは可能だが、神話を再検討していくとウェルトゥムヌスのもうひとつの特徴が見えてくる。ここではホラティウスとプロペルティウスの詩を参照する。ホラティウスの詩の中で、財を見せびらかす指輪をつけたり外したり、議員の印の紫綬を外して大邸宅から恥ずべき場所へ行ったり、ローマでは間男を、アテネでは賢者の真似をしたりする人物について、ウェルトゥムヌスの導きで生まれてきたと表現している⁽¹⁰⁾。つまり、その時と場合に応じて身なりを変え、身分さえも変えてしまうような人とウェルトゥムヌスが強く結びつけられていると考える。またプロペルティウスの詩においては、ウェルトゥムヌスが四季の神として実りを受け取り、その果実で身体を構成しているという本作の視覚的情報だけでなく、装飾品や道具によって多種多様な職業や技芸に長けた人間や神に成る神であることが述べられている⁽¹¹⁾。これらのことから、変身の際に身体の形を丸ごと変えてしまうユピテルのような変身ではなく、ウェルトゥムヌスは装飾品や持つ道具などにより、その時と場面に合わせて様々な技芸や性質を獲得する神であると再解釈できると私は考える。言い換えるならば、装飾品や道具によって見た目を変えることにより、本来の姿とは異なる姿を見せ、見る人にその外見のアイデンティティを有する存在だと思わせる、つまり仮装する神であると考えられる。このようなウェルトゥムヌスの変身の解釈をアルチンボルドもしていたのなら、彼の生きた宮廷文化や彼のモノを組み合わせて人物を表現する技法がウェルトゥムヌスと非常に高い親和性をもっていたと考えられる。したがって、次にこの仮装という発想はルドルフ2世の宮廷においてどのような文化として受け容れられ、アルチンボルドの制作活動とどう関係しているのかについて検討する。

3. ルドルフ2世の宮廷における仮装文化

ルドルフ2世の宮廷においては、寓意に満ちた入市式や祝祭、仮装が行われていた。ルドルフ2世が1577年にブレスラウ市に入る際に建設された凱旋門の版画が残って

いる⁽¹²⁾。またルドルフ2世は錬金術や天文学など自然科学、絵画や彫刻、金細工やガラス細工にも強い関心を持っていた。世界中から珍しいモノや奇妙な自然物、最先端技術を用いた人工物を集め、驚異の部屋と呼ばれる一室に世界の縮図を作り上げていた。また驚異の部屋に収められていたプラハ基準の日時計や精緻な金細工も例として挙げられる⁽¹³⁾。

このような学術的雰囲気や機知に富んだ文化を持つルドルフ2世の宮廷においてアルチンボルドは祝祭の衣裳デザインを担当していた。これらはルドルフ2世が1585年に開催した馬上試合の装飾デザインである⁽¹⁴⁾。人文科学の寓意や、職業としてのコック、馬にまたがる騎士やドラゴンの全身衣裳が挙げられる。衣裳のすべてが人間の技芸や職業、または幻想の生き物を主題としているが、それらはすべて人間の形を保ったままの衣裳となっている。つまり、アルチンボルドの仮装においても、人間に装飾品や道具を持たせることにより、主題やアイデンティティを提示するという表現技法が用いられていると考えられる。

その中でもコックに注目する。頭には壺を被り、腰には料理に用いるのだろう柄杓やコップを付け、左手には火の付いた大きなろうそくを持っている。この仮装衣裳においては、コックが用いるのものであろう調理器具を組み合わせることで装飾品とし、衣裳の外見を構成することでコックという職業を表現していると考えられる。このような仮装衣裳が示すメッセージを読み解くことができる者だけが真に祝祭を楽しむことができるものとされた文化がルドルフ2世の宮廷文化であり、その楽しさの最大の享受者だった人物がルドルフ2世だったと考えられる。

アルチンボルドはこのようにモノを組み合わせた見た目によって主題を表現するという技法を絵画作品に用いている。《司書》は積み上げられた本で身体が構成されており、頭の上で広げられた本は帽子となっている⁽¹⁵⁾。《司書》はヴォルフガング・ラツィウスの肖像画とされている。ラツィウスは蒐集家であり科学者で、マクシミリアン2世のクンストカンマーの責任者を務め、皇帝の貨幣コレクションや図書館を築いた人物だった。古代ギリシア・ローマや中世の歴史、貨幣学、ハプスブルク家年代記などを制作し、多くの研究成果を残した彼を表わすに当たって、本ほど適したモノはなかったと考えられる。《法律家》は魚や羽根をむしり取られた鳥によって顔が構

成されている⁽¹⁶⁾。あごひげは魚の尾鰭であり、口は魚の口に置き換えられている。纏った外套の首もとが開いており手紙や手稿などから構成される身体がむき出しになっている。下にのぞく2冊の本はどちらも中世を代表する法学者のものであり、16世紀の当ても読まれていた本である。この肖像画はヨハン・ウルリヒ・ツァジウスをモデルとしていると考えられている。ツァジウスは法学の知識を備えた行政官で、神聖ローマ皇帝一家の財務顧問を務めていた人物である。彼は馬車から転落し、顔の右側面にけがを負い、加えて生まれつき彼の片頬には腫れ物があったとされている。これらのことから、アルチンボルドによるモノを組み合わせて人物像を創るという表現技法は、モデルとなった個人の特徴をおさえ、そのアイデンティティが反映された見た目を描き出す技法であると考えられる。

また、個人だけでなく人間の社会における技能や職業を主題とした絵画作品もある。《肉／コック》《野菜／庭師》はともに上下反転することで絵画に表わされたものを十分に理解することができる⁽¹⁷⁾。これらの絵画も同様に、調理素材である肉と料理をのせる皿によってコックを、栽培の対象である野菜とそれを入れる器によって庭師を表現している。

アルチンボルドが実践した仮装衣裳や絵画におけるモノを組み合わせて人物像を構成する技法は、構成要素や外見的特徴によってモデルや技芸・職業のアイデンティティを提示する方法として用いられていると考えられる。これは装飾品や道具によって見た目を変化させ、特定のアイデンティティを主張するウェルトウムヌスの変身方法と親和性が高く、アルチンボルドがこれまで視覚化されてこなかったウェルトウムヌスという神の視覚化に挑む理由になった可能性も考えられる。そしてこの機知に富んだ仮装的表現は、理解できる教養とその技芸への知識を持つものだけに理解されるものとして、芸術家だけでなく皇帝を含む宮廷の人々に楽しまれた文化だった。

4. 仮装する神と皇帝

これらのことから《ウェルトウムヌスとしてのルドルフ2世》を改めて解釈すると

本作の特徴として以下のことが考えられる。本作にも適用されているモノを組み合わせる表現技法は、ウェルトゥムヌスという四季を支配し変幻自在に自身のアイデンティティを変化させる神を視覚化し、絵画として表現することにおいて適した表現であったこと、その表現によってウェルトゥムヌスを描き出し、ルドルフ2世と重ね合わせることは、仮装を楽しむ文化に生きた皇帝にとって機知に富み、非常に喜ばれる称揚方法だったこと、そして仮装の考え方から、外見となっているウェルトゥムヌスはルドルフ2世のアイデンティティを表象する技法であることが考えられる。さらにこのようにしてウェルトゥムヌスとルドルフ2世を重ね合わせることで、四季や四大元素の支配者であるというメッセージに加えて、多種多様な技芸や教養を有した文化的な世界の支配者として皇帝ルドルフ2世を称揚しているというメッセージも込められていると考えられる。

5. おわりに ——仮装文化によって解釈される本作——

以上のように本論文では、ウェルトゥムヌスの変身方法の特異性を起点として、アルチンボルドの表現やルドルフ2世の宮廷文化との関係を考察することで《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》の新しい観点からの解釈を試みた。

註

- (1) ジュゼッペ・アルチンボルド《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》1591年、油彩・板、70×57cm、スコークロステル城、ウプサラ、スウェーデン。
- (2) Ovidius, Pablius, *METAMORPHOSES*, translated by Miller, Frank Justus, *METAMORPHOSES II*, The Loeb Classical Library, 1976, pp. 344-351. オウィディウス『変身物語(下)』中村善也訳、岩波文庫、1984年、283-287頁。
- (3) Ovidius, Pablius, *FASTI*, translated by Frazer, Sir James George, *FASTI*, The Loeb Classical Library, 1976, pp. 348-351.
- (4) Comanini, Gregorio, *Il Figino*, 1591. translated, with introduction and note, by Ann Doyle-

アルチンボルド《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》

Anderson and Giancarlo Maiorino, *The Figino, Or the Purpose of Painting: Art Theory in the Late Renaissance*, University of Toronto Press, Toronto/Bffalo/London, 2001, p. 25.

- (5) マルティナーノ・ロータ 《甲冑を身につけた皇帝ルドルフ2世》1576-1580年、油彩・カンヴァス、51 × 42 cm、ウィーン美術史美術館、ハンス・フォン・アーヘン 《神聖ローマ皇帝ルドルフ2世》1600-1603年、油彩・カンヴァス、60 × 48 cm、ウィーン美術史美術館。
- (6) ジュゼッペ・アルチンボルド 《冬》1563年、油彩・板、66.6 × 50.5 cm、ウィーン美術史美術館、《春》1563年、油彩・板、66 × 50 cm、マドリッド、王立サン・フェルナンド美術アカデミー美術館、《夏》1563年、油彩・板、67 × 50.8 cm、ウィーン美術史美術館、《秋》1572年、油彩・板、91.4 × 70.2 cm、デンヴァー美術館。
- (7) ジュゼッペ・アルチンボルド 《水》1566年、油彩・板、66.5 × 50.5 cm、ウィーン美術史美術館、《大気》1566年、油彩・カンヴァス、74.5 × 56 cm、スイス、個人蔵、《火》1566年、油彩・板、66.5 × 51 cm、ウィーン美術史美術館、《大地》1566年、油彩・板、70.2 × 48.7 cm、リヒテンシュタイン侯爵家コレクション。
- (8) Kaufmann, Thomas DaCosta, *Arcimboldo: Visual Jokes, Natural History, and Still-Life Painting*, The University of Chicago Press, Chicago/London, 2009.
- (9) Propertius, Sextus, *Elegiae*. translated by. Butler H. E., *The Elegies*, Book IV, The Loeb Classical Library, 1976, pp. 274-281. ウェルトゥムヌスの詩を参照する発想源、そして抜粋部分の参考資料はトマス・ダコスタ・カウフマン『綺想の帝国』、斉藤栄一訳、工作舎、1995年、第4章。
- (10) ホラティウス『ホラティウス全集』鈴木一郎訳、玉川大学出版部、2001年、『風刺詩 第二巻』。
- (11) 註9参照
- (12) ヨハネス・トゥエンガー 《ルドルフ2世のブレスラウ入市のための凱旋門》1577年、パウルス・ファブリティウス『アーチもしくは凱旋門……きわめて短い叙述』より。
- (13) HDのモノグラミスト《十字架の日時計》1619年、鍍金された銅合金、17.8 × 12.1 cm、ウィーン美術史美術館、作者不明《金線細工の器》16世紀末頃、金、3.6 × 10.3 cm、ウィーン美術史美術館。
- (14) ジュゼッペ・アルチンボルド 《ルドルフ2世に献じられた馬上試合の装飾デザイン集》1585年、ウフィッツィ美術館、フィレンツェ、《魔術師》ペン・青の淡彩・紙、21 × 16.9 cm、《コック》ペン・青の淡彩・紙、30.5 × 20.2 cm、《「天文学」の寓意》ペン・青の淡彩・紙、30.1 × 20.3 cm、《槍を持つ女》ペン・青の淡彩・紙、29.4 × 20.8 cm、《馬にまたがる騎士》ペン・青の淡彩・紙、30.4 × 21 cm、《龍の仮面をかぶった男》ペン・青の淡彩・紙、30.4 × 21 cm。
- (15) ジュゼッペ・アルチンボルドに帰属《司書》油彩・カンヴァス、97 × 71 cm、スコークロステル城、1621年の目録に記載あり。
- (16) ジュゼッペ・アルチンボルド 《法律家》1566年、油彩・カンヴァス、64 × 51 cm、ストッ

アルチンボルド 《ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世》

クホルム国立美術館。

(17) ジュゼッペ・アルチンボルド 《肉 / コック》 1560 年代、油彩・板、52.5 × 41 cm、ストックホルム国立美術館、《野菜 / 庭師》 1587-91 年、油彩・板、35.8 × 24.2 cm、クレモナ市立美術館。

